受ける人、働く者を包む「柔らかさ」

⑪ キャップスファミリークリニック北葛西（東京都江戸川区）

キャップスとしては二つ目にできたクリニック。
子供から大人まで生涯を通じてのかかりつけ医を目指すため、
小児科に加え、内科・アレルギー科を標榜

『きれいですね』と多くのご家族に言っていただいています。お子さんは来院すると、走っていって好きな本をまず取る。読みながら待つことが多いようです。すぐに呼んでしまったときには、『あまり読めなくてごめんね』と、こちらが謝ることもあるくらいです(笑)」

澤井潤院長はそう言うと、相好を崩した。開院から1年2カ月が経過した。澤井氏は昨年12月に着任。半年ほどをここで過ごしたことになる。365日、夜8時（小児科は9時）まで診療を行う。

「一人ではできない。僕たちが目指す医療も一人でやることを前提にはしていません。多くの医師でやっていくことで気が付けることもある。医療者の疲労にも配慮できる仕組みもつくりたいと考えています。医療を受ける方、働いている者の両方に優しい環境にしたい」（澤井氏）

一人で医療を続けると、徐々に外の情報が入りづらくなってくる。一人でも勉強している医療者はもちろんいるだろうが、新しいものに目が届きにくくなってくる。グループ内の4クリニックでは情報の共有を心掛ける。はやっている病気の情報をいち早く手に入れたり、「こんな患者さんがみえて困った」

待合。壁には多くの絵本や児童書。
代官山のクリニック同様、選書は代官山
蔦屋書店のコンシェルジュが担当

中待合。
患者の健康状態を配慮し、
照明は間接照明に近いものを
用いている

特別待合室。
ワクチンを接種する患者の
感染対策にも気を配っている

タブレットを使う問診システムは
キャップスグループの全クリニックに共通

小児科診察室。
壁の絵で子供たちの関心を引き、
医療機関特有の「怖さ」を緩和

処置室。
熱性けいれんなどの患者が来ても対応
できるよう、設備は動線を考えて整えてある

というときもすぐにメールしたりする。「相談しやすい環境」が整っている。

予防医療には力を注いでいる。中でも、予防接種への取り組みは特筆できるものだ。

「お母さん方はワクチンに高い関心を持っておられる。公費で打てないものでも、情報を伝えると、『打たせたい』『私は打たなくていいんですか』といった反応が返ってきます」（同前）

ワクチンばかりではない。「病気の情報」に患者の家族は非常に敏感。だが、「病気の情報を知るコンテンツ」は世の中にそれほどない。

「一方、本当に正しいのかどうか分からない中途半端な情報はいっぱいある。インターネット上や一部のメディアで目にするようなものです。その割に医療機関から伝えられる情報は極めて限られている。保護者の方向けの冊子を作ったのを手始めに、今後もいろいろやっていきたい」（同前）

医療を通して患者に最大限の幸福を提供する――キャップスのミッションだ。澤井氏はこうした理念に共鳴し、「ここで働く」と即決した。

「理念はぶらさず、ハードやソフトは時代に合わせて変えていく柔軟性を持っていたい」（同前）